後を繼ぎ、その隋はまた北朝の後を繼いでいるという事實、換言すれば、本質的には唐が北方民族と漢民族との間の血液的・文化的融合によつて成立した北朝文化の正統の後繼者であつたという事實に歸すべきであろう。いずれにしても、純粹に中國國家であるよりも、むしろ世界國家であつた唐帝國においては、外來文化要素の流入も一層盛んであれば、中國を舞臺とする異民族の活動も多方面に亘つて頗る活潑だつたのである。

ただ東亞に巨然たる大帝國を建設して、遙かに西方のサラセン帝國（大食）と相對峙していた唐王朝も、久しくその全盛を維持することはできなかつた。蓋し、七世紀の末から八世紀の初めにかけての、宮廷内部における政權爭奪、いわゆる武韋の内亂を契機として、唐の國力の基礎をなす諸制度が、早くも紊れ始めた結果、その對外統制力も自ら弛緩せざるを得ず、相次いで唐の羈絆を脱した諸民族は、盛んにその邊境を騷がし、積極的に侵寇しなかつた者も、各地に大小の統一國家を建設し始めたからである。朝鮮における新羅の半島統一、滿洲方面における渤海の建國、契丹（キッタン）の擡頭、蒙古高原における突厥勢力の復興、西域方面における西突厥の殘黨突騎施（チュルゲシュ）の活動、吐谷渾（トヨクコン）に代つたチベット族吐蕃（トバン）の進出、雲南方面における六詔蠻（南詔）の勃興などがそれである。

かくて漸く衰頽の兆を示しつつあつた唐の國勢は、八世紀の初葉に玄宗（七一四―五五年）が即位し、鋭意諸政の刷新を計るに及んでやや回復されることになつたが、しかも唐初の全盛に及ぶべくもなかつたことは、この頃に至つて完了した六都護府から、十節度使（別表參照）による新統治機構への轉換がこれを物語つている。蓋しこの事實たるや、僅かに唐勢力圏の著しい縮小を示すばかりでなく、單なる外地派遣軍の指揮官に過ぎなかつた從來の